

# 「從來厭離此穢土」

——憶良が基ついた仏教言説——

はじめに

本稿では、『万葉集』巻五の「日本挽歌」（七九四〜七九九）に前置される漢詩を取り上げる。その漢詩のさらには、やや長い漢文が置かれ、詩に対する詩序のような様相を呈している。本文とその読み下しを次に掲げる<sup>1)</sup>。

蓋聞、四生起滅、方夢皆空、三界漂流、喻環不息。所以維摩大士在乎方丈、有懷染疾之患、釈迦能仁坐於双林、無免泥洹之苦。故知、二聖至極、不能弘力負之尋至、三千世界誰能逃黑闇之搜來。二鼠競走、而度目之鳥旦飛、四蛇争侵、而過隙之駒夕走。嗟乎痛哉。紅顏共三従長逝、素質与四徳永滅。何凶、偕老違於要期、独飛生於半路。蘭室屏風徒張、斷腸之哀弥痛、枕頭明鏡空懸、染筠之淚逾落。泉門一掩、無由再見。嗚呼

哀哉。

愛河波浪已先滅、苦海煩惱亦無結。從來厭離此穢土、本願託生彼淨刹。

高 松 寿 夫

蓋し聞く、四生の起滅は、夢の皆空しきが方く、三界の漂流は、環の息まぬが喻し。所以に維摩大士は方丈に在りて、染疾の患へを懐くことあり、釈迦能仁も双林にいまして、泥洹の苦しびを免れたまふことなし、と。故に知りぬ、二聖の至極すらに、力負の尋ね至ることを払ふこと能はず、三千世界、誰か能く黒闇の搜り來ることを逃れむ、といふことを。二つの鼠競ひ走りて、目を渡る鳥旦に飛び、四つの蛇争ひ侵して、隙を過ぐる駒夕に走く。嗟乎痛きかも。紅顏は三従と共に長く逝き、素質は四徳と永く滅えたり。いかにか凶らむ、偕老、要期に違ひ、独

飛半路に生かむとは。蘭室に屏風徒に張りて、断腸の哀しびいよいよ痛く、枕頭に明鏡空しく懸かりて、染筠の涙いよいよ落つ。泉門一たび掩ぢて、再び見む由もなし。嗚呼哀しきかも。

愛河の波浪すでに滅え、苦海の煩惱もまた結ばほることなし。従来この穢土を厭離せり、本願に生をその淨刹に託せむ。

右の本文で太字にした部分が、本稿で主な対象とする漢詩である。この一連の漢詩文は、従来から山上憶良の作であると考えられているが、そのことを疑う見方がないわけではない。例えば、近年では新日本古典文学大系（以下、新大系）が、「続く日本挽歌の「…山上憶良上」が、ここまでを受けるとすれば憶良の作となるが、あるいは前の大伴旅人の書簡の末に書き付けられていたものと理解することも可能」と述べている。「大伴旅人の書簡」とは、右に掲示した漢詩文の直前に位置する「報凶問歌」（七九三）とそれに前置される漢文のことを指している。しかし、本文（「報凶問歌」と前置漢文）よりも長大な「端書」を想定するのは不自然である。直前の「報凶問歌」と前置漢文には左注に神亀五年六月二十三日という日付を有し、直後の「日本挽歌」にも「神亀五年七月廿一日 筑前国守山上憶良上」という、日付と作者に関する左注が付せられている。

るのに対して、問題の漢詩と前置漢文には作者等に関する注記が直接には存在しないことになってしまいが、これは、「日本挽歌」に引き続き掲載される三つの長歌作品群（八〇〇～八〇五、いわゆる「嘉摩三部作」）が、八〇五番歌左注によって一括されているのと同様に、「日本挽歌」の左注が、当該の漢詩文にも懸るものとしてある、と考えるのが自然であろう。<sup>2</sup>本稿が対象とする漢詩文は、通説にしたがって、山上憶良作と考えて問題なからう。

### 一 山上憶良に先行する「厭離穢土」

この詩を論じるにあたって、まずはその第三句の「厭離此穢土（此の穢土を厭離せり）」に注目したい。「厭離穢土」という、お馴染みのフレーズがそこに認められる。当該の憶良詩の詩想について詳細な分析を加えた論者に、芳賀紀雄「憶良の挽歌詩」がある。そこではこの第三句について、「い、わゆる、「厭離穢土、欣求浄土」の念を開陳し」（傍点高松）といい、また「憶良が第三句で言及する「厭離穢土」の教説は、かれならずとも理解の届くところであろう」と述べるにとどまる。「厭離穢土」については、いわば常識的な仏教言説といった捉え方で済ませているように見受けられる。この認識は芳賀論文にとどまらず、近年の諸注釈にも共通しており、第三句に殊更の注を付したものを

見出せない。しかしこんにちの我々にとつて、「厭離穢土」なる文言が常識的仏教言説となつている源泉は、源信『往生要集』にこの句が掲げられていることに求められるだろう。近年の浄土教学の専論においてすら、「厭離穢土」という熟語は、管見のかぎり『往生要集』に見えるのが最初<sup>④</sup>との記述がみられる。しかし、十世紀後半の著述によつて定着した「常識」を、八世紀前半の言説にあてはめて批評することが適切でないことは明白である。いったい山上憶良は、このフレーズをどこから学んだのであろうか、その点を明らかにしておく必要があるだろう。

山上憶良より古い「厭離穢土」の用例を見出すことは、こんにちにおいてそれほど難しいことではない。近年、各種漢字文献の電子データ化が進められているが、中でも東京大学の「大蔵経テキストデータベース委員会」が作成しウェブ上で公開している「大正新脩大蔵経テキストデータベース」(S.A.T.<sup>⑤</sup>)は、まことにありがたい、優れたデータベースである。その利用によつて瞬時に、山上憶良以前の「厭離穢土」の用例を二つ見出すことができる。次のA・Bに掲げるのが、それである。

A 今<sup>①</sup>解此経。合以六門分別。一経起所因。二経之宗緒。三明経体性。四叙経不同。五科品所從。六积本文義。

第一<sup>②</sup>経起所因。略有五種。一為令衆生起欣厭故。…

由此経起略有五因。寧知令衆生起於欣厭。<sup>③</sup>欣厭有二。一内欣厭。二外欣厭。<sup>④</sup>内欣厭者。厭謂厭生死身。欣謂欣当仏身。…<sup>⑤</sup>外欣厭者。厭謂雜穢王。欣謂欣清浄土。…<sup>⑥</sup>外欣厭者。厭謂厭離穢土。欣謂欣清浄土。

B 問曰。<sup>①</sup>如大品経等。説内空外空内外空等。今浄土即

是外空。衆生即是内空。<sup>②</sup>既爾有何衆生為能生。有何浄土為所生。又維摩経言。諸仏国土亦復皆空。…

釈曰。…何為將彼空経。難斯浄教。信彼謗此。豈成理也。然<sup>③</sup>仏説法不離二諦。一俗諦。二第一義諦。俗諦是因縁生法。依他起性。非有似有。第一義諦は無相真法。円成実性。諸聖内證。妙有真有。然其二諦非一非異。…偏明第一義諦。説一切皆空。<sup>④</sup>欲令衆生捨凡成聖。断悪修善。欲求浄土厭離穢土。具説種種法界因果差別。  
(懐感『釈浄土群疑論』卷二)

Aは『説無垢称経疏』。慈恩大師・基(窺基)とも。六三二(六八二)による、『説無垢称経』——『維摩経』の玄奘による新訳——の注釈である。本文の末尾に著者慈恩大師自身による識語(後掲)があり、それによると、唐の咸亨三年から五年(六七二―六七四)にかけての講経用に著述されたものであるという。Bは『釈浄土群疑論』。浄土教に対する様々な疑義に答えた論書。後世、法然によつて

浄土五祖の第四に数えられる懷感（七世紀後半の僧）の著

で、孟銑の記した序によると、完成前に懷感が歿したため同門の懷暉が完成させたものという。<sup>6)</sup>懷感の歿年が未詳ゆえ、正確な成立時期が特定できないが、懷暉は七〇一年に入寂しているので、遅くともそれ以前の成立となる。懷感・懷暉の師である善導の歿年（六八一）が、**A**の著者である慈恩大師のそれ（六八二）とほぼ同じころなので、**B**は**A**に若干遅れる成立といった見当になるかと考えられる。**A・B**いずれの文献も、正倉院に残った写経所文書中に書名は見えない。<sup>7)</sup>山上憶良が披見できるタイミングで伝来していたかどうかまでは、厳密には断言できないが、その可能性は考えられる文献ではある。**B**は浄土教学の著述であり、『往生要集』に直結する言説と考えることが可能であろう。一方、**B**より若干先行する可能性がある**A**は、『維摩經』（その新訳である『説無垢称經』）の注釈で、著者は唯識・法相の僧として著名な慈恩大師である。これに拠るに、「厭離穢土」は、浄土教に限った言説ではなく、現存の文献からうかがうに、むしろ浄土教以外の教学に出現した言説である可能性が想定できることになる。

山上憶良の「厭離彼穢土」が、いかなる言説の下に出来るのかを見極めるためには、まずは七世紀後半のこの二例の「厭離穢土」が、どのような文脈で説かれたものかを

検討しておく必要があるであろう。

まずは**A**について。引用箇所は、『説無垢称經』の開卷「序品」（一般に行われている鳩摩羅什訳『維摩詰所説經』では「仏国品」）の注に相当する。そこではまず、この經典の「経起所因」が説かれる（傍線部1）。「経起所因」とは、經の起こり、つまりこの經典が存在する理由を説く。なぜこの經典が存在するか、なにを目的としてこの經典は存在するのか、ということであろう。それには五つの要因があるといい、その第一は、「衆生をして欣厭を起さしめんが為」だという（傍線部2）。この「欣厭」には、「内欣厭」と「外欣厭」との二種があつて（傍線部3）、「内欣厭」とは「厭生死身」および「欣当仏身」のことで（傍線部4）、「外欣厭」が、「厭離穢土」および「欣清浄土」のことだという（傍線部6）。これらの言説によると、「厭離穢土」という成句は、衆生を正しい解脱に導くにあつての方便としての「欣厭」という概念に基づくと察せられる。正しい仏教者としてのあり様へと導くために、衆生に「欣厭」への覚醒を促すといったところであろう。<sup>8)</sup>

次に**B**について。『釈浄土群疑論』は、浄土教に対する様々な疑義を問答形式で解説した書であるが、引用したくだりは、様々な大乘經典が、一切は空である（実体などは存在しない）と説いている（傍線部1）の、「浄土」な

どという実体を求めさせるのは、仏の教えに齟齬すること  
なのではないか、との疑問（傍線部2）と、それへの回答  
の「第一義諦」と、多くの衆生に理解しやすいように説く  
「俗諦」とがあつて、どちらかが誤りでどちらかが真とい  
つたような性質で割り切れるものではない、という（傍線  
部3）。「厭離穢土」とは、ここでは「欲求浄土」という文  
句と組み合わせられて、衆生を導く「俗諦」として説かれ  
たものだということになるようである（傍線部4）<sup>10</sup>。

## 二 「欣厭」

山上憶良をさかのぼる「厭離穢土」の例を二つ指摘した  
のだが、実は、Aの例ははたして「厭離穢土」の例といっ  
てしまつてよいのかどうか、検討の余地がある。Aにおい  
ては、「厭離穢土」と対となる文言が「欣清浄土」となつ  
ている。「厭離・穢土」という句構成と「欣・清浄土」と  
いう句構成とは、対句としては明らかに不整合を来してい  
る。それを受けて改めてAで掲げた部分を検討するに、問  
題の「厭離穢土」の直前（傍線部5）には「外欣厭者、厭  
謂離穢土」との本文がみえる。ここは本文の乱れがあるよ  
うで、大正蔵の校異注（先の掲示では傍記のかたちで示し  
た）によれば、底本には「王」に「土カ」という傍記があ

り、また対校に用いた一本（甲本と呼称される）では、  
「離」は「離」になつてゐるといふ。傍線部5は、傍線部  
6に先んじて、「外欣厭」について解説してゐると思しい  
が、「王」は底本傍記が指摘するとおり「土」の誤りなの  
であろう。「欣厭」の「厭」について敷衍的に説明してい  
ると考えられ、「謂」字の下に「厭」字がほしいところで、  
つまり「離穢土」の部分は本来「厭離穢土」とあつたので  
はなかるうか。これだと、句構成は「厭・離穢土」となり、  
「欣清浄土」と整合する。「欣清浄土」といふ文言は、傍線  
部5と傍線部6とで異同はない。傍線部6の「厭離穢土」  
も、本来は「厭離穢土」とあつたのではなかるうか。大正  
蔵の『説無垢称経疏』の底本は、その奥書によれば、保安  
二年（一一二二）の奥書を有する本を享保十六年（一七三  
二）に書写したものを、さらに天保七年（一八七六）に書  
写した本である。厳密な本文校訂もままならない状況での  
書写であつたことがうかがえ、成立（咸亨五年（六七二）  
ごろ）から相当の年数がたつた後の末流の写本といえ、本  
文に問題となる箇所が少なくないであろうことは致し方な  
い。そして、保安二年の段階では、すでに『往生要集』に  
よつて「厭離穢土」といふ成語もよく知られるところとな  
つていたはずで、「厭離穢土」とあつた本文が、いずれか  
の書写の段階で、その当時にはすでによく知られていた成

語「厭離穢土」に誤写されてしまう可能性は、十分に想定されるというものではなからうか。甲本が傍線部5の「離」を「離」としてしまっているのは、そのことをうかがわせ、大正蔵の底本でも傍線部6では同様のことが起つてしまつたということなのだと考えられる。つまりAは、そもそも「厭離穢土」の用例とはいえない可能性が高い。

一方Bは、傍線部4で対とされる文言が「欲求・浄土」であつて、「厭離・穢土」と句の構成が等しい。実は、『釈浄土群疑論』では、巻五に「厭茲穢土、欣彼浄方」という文言もみえる。この「茲」と「彼」の対偶は、当該の山上憶良詩の「此」「彼」の対偶を思わせる。

以上のことから、山上憶良が依拠したのはAかBかという二者択一で考えるのであれば、それはBであつたという結論になるだろう。Bつまり『釈浄土群疑論』は、浄土教への様々な疑義に答えた書で、山上憶良詩の主題——これがかにかについては、後に改めて述べる。とりあえず浄土の希求と捉えておいて間違ひはなからう——にも相応しい。

ところで、前節の末尾で、『釈浄土群疑論』における「欲求浄土、厭離穢土」という文言は、衆生を導く「俗諦」として説かれたものであつたと述べた。この、衆生を解脱せしめるための一種の方便としての「欲求浄土、厭離穢土」という考えは、さきほどのAの言説における「欣厭」

との類似を思わせる。これはどうも偶然の一致ではないようである。『釈浄土群疑論』の著者である懐感は、元來、法相宗で修学した僧侶で、『釈浄土群疑論』には唯識的な観点や用語が多く認められることは、しばしば指摘されるところである。浄土教系最古の「厭離穢土」言説も、法相教学の影響から出来るものである可能性は、考慮されるべきことのように思われる。

Aに関して、「厭離穢土（厭離穢土）」は「欣厭」という考え方と密接して唱えられた言説であることを確認した。この「欣厭」という語は、「厭離穢土」に較べれば、ある程度まとまつた用例が見出せる語である。「欣厭」をS A Tで検索すると、三六六例が検出される。いまのところ、この「欣厭」なる語の使用例としてもっとも古いものは、慧遠（淨影寺・地論宗、五二二～五九二）や智顛（天台智者大師、五三八～五九七）の言説あたりではないかと思われる。慧遠の著述としては『大般涅槃經義記』・『大乘義章』などに「欣厭」の用例が認められ、智顛のものとしては『法華經玄義』に見える。慧遠・智顛ともに、隋代以前からの活躍が知られるが、論疏は隋代の著作が中心と考えてよい。少し降つて吉藏（五九四～六二三）の言説にもある程度まとまつた「欣厭」の用例が見出せる。『法華義疏』・『法華遊意』・『勝鬘宝窟』・『浄名玄論』・『大乘玄論』

といった著作に「欣厭」が用いられている。吉蔵は三論宗の大成者とされる。三論の教学は、日本においても高句麗經由の元興寺流、智蔵經由の法隆寺流、道慈經由の大安寺流と、複数の経路で伝来し、奈良時代にあつては大きな勢力を誇つた。<sup>13)</sup>「欣厭」は、隋代のころにのみ出された語で、初唐にかけて諸宗派の教説の中で比較的盛んに用いられたらしいことが見てとれる。

### 三 講經・講説の言説としての「厭離穢土」

この「欣厭」という語が、諸宗派の教説のなかで重宝に利用されたらしいことを端的にうかがわせる事柄としては、道世編『法苑珠林』（六六八年成立）巻二二「入道篇」において、冒頭の「述意部」に引き続き「欣厭部」なる一節が設定されていることなどが挙げられるであろう（すでに『諸経要集』巻四「入道部」も同様の構成を有する）。『法苑珠林』の一般的な構成としては、各篇の冒頭に「述意部」が置かれ、引き続きそれに関する諸経典からの引用によつて成る「引證部」、そして関連説話を掲示する「感応縁」の数々といった展開となる。それがこの「入道篇」では、「引證部」に先だつて「欣厭部」と「剃髮部」という二部が特に立てられる。いずれも経典からの引用なので、「引證部」の一部が独立したという体裁なのである。「入

道篇」にとつて、「欣厭」と「剃髮」とは特立すべき項目であつたということになる。出家入道において「剃髮」が重要事項であることはこんにちの我々にもよく理解できるが、それと同様に特立すべき事項として「欣厭」はあつたということである。「剃髮」にさらに先だつて、出家入道のきっかけとなる認識としての「欣厭」ということであると考えられ、やはりこれまでみてきた諸教説における「欣厭」に通じるものをそこに認めることができる。

SATの検索によるに、「欣厭」が漢訳仏典の本文に用いられた例は、玄奘訳『説無垢称経』が初出で、かつ他例が極めて少ない。もっぱら論疏において利用された語であつたと思しいが、用例が法相の言説に集中している様相が見受けられることには注目される。問題の『説無垢称経疏』も、玄奘翻訳の経典に対する慈恩大師の注釈なので、典型的な法相の言説と見做せるわけであるが、この文献中には都合二十三回にわたり「欣厭」は出現し、単独の文献におけるこの出現頻度は、他と比較してずば抜けて多い。浄土教系の言説にも用例は認められる——もつとも早い文献は七世紀中葉かとされる迦才『浄土論』——が、特に多いというわけではない。「厭離穢土」の用例が認められる『釈浄土群疑論』にも、「欣厭」は一例だけ認められる。

前節で述べたとおり、『説無垢称経疏』に見える「厭離

穢土」は、確例としては疑わしいもので、本来は「厭雜穢土」とあったものと考えられる。しかしそれは、そのころ諸教学とりわけ法相教学の言説において頻繁に用いられた、「欣厭」から派生した文言であった。その点においては、「厭雜穢土」も「厭離穢土」と同様の成り立ちを有する文言であることになる。実は、「厭離穢土」ではないが、それに類似の文言は、他にもいくつも見出すことができる。「厭離生死、欣樂善法」（慧遠『大乘義章』卷二）、「厭此穢土、欣彼極樂」（吉藏『觀無量壽經疏』）、「厭患生死、欣求仏身」（吉藏『浄名玄論』卷七）、「欣生他土、厭此娑婆」（李通玄『新華嚴經論』卷三）などがそれである。挙げたのはいずれも隋から初唐にかけての論疏に見えるものであるが、「欣厭」を敷衍するにあたって類似の文言が各種用いられていたことがうかがえる。

山上憶良以前の「厭離穢土」の確例が一例だけ『釈浄土群疑論』に見出せるのであるから、それを典拠と考えればよいようなものであるが、本稿で「欣厭」に関する言説をくどくどと説くのではなく、理由がある。それというのも、山上憶良の言説は、特定の典拠や教説の下に捉えるよりは、もう少し広がりのある言説の中で影響を考えた方がよいのではないかと考えるからである。山上憶良の仏教受容は、特定の仏教教説の受容と捉えるより、むしろ仏教語彙の受

容といった方がよいぐらい、いうなれば断章取義的な性格が濃厚で、反面、体系だった教義受容の様相は、あまり明確にはうかがえないように思われる。その傾向については、すでに山上憶良の「沈痾自哀文」の分析でも指摘したことがある。そしてその傾向は、いま問題にしている七言詩に前置される漢文の冒頭——維摩居士や釈迦の例を挙げて病や死を論じるくだり——などにも顕著で、維摩居士の病臥や釈迦の入寂を、病や死の苦痛に結びつけるのは、よくいわれるとおり、仏教教説としては付会の説といわざるを得ない。（断章から自分の主張を作り上げてしまうという点では、山上憶良はきわめて独創的な思想家であった、と評価することもできなくはない。）

ところで、『説無垢称経疏』には、慈恩大師による次のごとき卷末識語が記されている。

基以咸享三年十二月二十七日。曾不披説古徳章疏。

遂被并州大原県平等寺諸徳迫講旧経。乃同講次。制

作此文。以賛玄旨。夜制朝講。隨時遂忘。曾未覆問。

又以五年七月。遊至幽明蘇地。更講旧経。方得重覽。

文雖疏而義蜜。詞雖淺而理深。但以時序匆迫。不果周

委言。今経文不同之処。略并叙之。諸徳幸留心而

覽也

これによると、僧侶に向けた講経用に執筆されたものら

しい(傍線部)。七世紀・八世紀には、そのような専門的な学識を有する者だけではなく、広く衆生への布教を目的とした講經・講説の言説が、数多く著述されていたことが判っている<sup>15)</sup>。しかし、その具体的なテキストは、現在となつては断片的に敦煌遺文の中に確認できる程度となつてしまつてゐる。「欣厭」という概念を印象的な四言一対の章句に敷衍することは、このような講經・講説の場面でこそ意味があつたようにも思われる。今では失われてしまつた、講經・講説の場における言説の語彙から、山上憶良は「厭離穢土」の句を獲得した、といった経緯を想定するのがよいのではなからうか。

#### 四 「従来」の理解について

前節では、山上憶良詩の「厭離此穢土」という文言の源泉を考証したのであつたが、意味するところは、現在の汚らわしき世間を厭うという従来の通説的理解で問題はなく、次句「託生彼淨刹」はそれを受けて、彼岸の淨土への転生を期待する句と理解する、これまた通説的な解釈でよいであらう。これら二句の理解をめぐるのは、こんにち諸注釈書・諸論考でも大きな異見は示されていないように見受けらる。一方、「厭離此穢土」の直前の「従来」の解釈には、「もとより」(澤瀉注釈・井村全注・伊藤釈注など)「かね

て」(中西文庫)などと理解されてきた通説に対して、新大系が次のような異見を唱えた。

「従来」は、妻が亡くなつて「それ以来」の意味。東晋の陶淵明の「詠貧士(其四)」は、「従来まさに千載ならんとするも、未だ復たこの儻(たぐひ)を見ず」(貧士黔婁の死以来千年になるが、肩を並べる人物は再び出ない)と言ふ。詩における「従来」の語が「も」とから」の意味で用いられるのは梁代以降のこと。

以来、注釈・論考においては、この新大系説を積極的に受け入れる立場を表明するものと、依然、かつての理解のまま解釈するものとの二つの立場が併存する状況である。

新大系が指摘する「従来」の語誌的部分はまさにそのとおりで、「それ以来」の意の「従来」は、謝靈運「永初三年七月十六日之郡初発都」(『文選』卷二六)の「従来漸二紀、始得傍帰路。(従来漸く二紀、始めて帰路に傍るを得たり。)」など、他にも少なからぬ例を挙げることができる。しかし、「もとから」の意の「従来」がそれに劣らず多いのも事実で、王訓「奉和率爾有詠」(『玉臺新詠』卷八)の「殿内多仙女、従来難比方。(殿内仙女多し、従来比方し難し。)」などはその一例である。この意の「従来」が梁代以降の出現であつたところで、その梁代以降から初唐にかけての語彙にも、八世紀日本の漢詩文は多大な影響を受けて

いる。新大系の指摘が、ただちに山上憶良詩の「従来」の解釈を決定するわけではない。問題は、山上憶良詩の内容の理解と密接することになる。新大系は、一首の大意を「妻を失ったことにより、かえって愛欲、煩惱に悩まされることもなくなり、それ以来、人の世を穢土と厭い、浄土を願うようになった心境」と捉える。この理解に積極的な支持を表明する論に鉄野昌弘「日本挽歌」<sup>16</sup>があるが、鉄野論文は、当該詩の前半について「妻への様々な「愛」の感情が、その死によって消滅してしまっただけをいうのではないか」とし、「したがって改めて、未練もなくなった「穢土」から、「淨利」への往生を願わずにはいられないのである」と説く。

当該の山上憶良による漢詩文が、『万葉集』巻五で直前に配置される大伴旅人「報凶問歌」を受けた作であることは明らかである。大伴旅人は、妻の死という現実に向直し、「世の中をむなしきものと知」ったが、その体験によって「いよよますます」の「悲し」さを味わった、とうたう。妻の死に逢って深い悲しみに沈む男の姿に対して、新大系などが示す、「妻を失ったことにより、かえって愛欲、煩惱に悩まされることもなくなり、それ以来、人の世を穢土と厭い、浄土を願うようになった心境」とは、随分と妻の死の受け入れ方に懸隔がありはしないだろうか。そこが当

事者である大伴旅人と、しよせん第三者である山上憶良との相違なのだ、といえなくもないかもしれないが、しかし、同じ山上憶良による前置漢文の方では、「嗟乎痛きかも」「嗚呼哀しきかも」と、悲嘆の情を隠そうとしない。山上憶良は大伴旅人の立場に成り替って表現しているのだが、前置漢文にうかがえる心境は、「妻を失ったことにより、かえって愛欲、煩惱に悩まされることもなくな」ったというようなものとはとても思えない。やはり漢詩における死の受け入れ方とは、懸隔がある。これは「従来」の理解が新大系とは異なる他の注釈や論考の解釈においても、同様に解消されない違和感として残るように思われる。「従来」を「もとより」「かねて」と理解すると、この詩の作者ははるか以前から現世を厭い浄土への転生を願っていたことになり、前半二句とも相俟って、すっかり悟り澄ましたような人物像となる。「報凶問歌」や前置漢文との懸隔は一層甚だしくなってしまう。むしろ新大系の理解は、そのような違和を解消しようとするために主張されたものなのであろう。しかし、やはり違和感の根本的な解消には至っていないと思われることは、述べたとおりである。続く「日本挽歌」においても、妻の死をひたすら嘆く男の境地が披歴される。いずれの理解によっても、漢詩に表明された心境だけが、ひとつだけ孤立して異質な印象を与えているよ

うに思われるのである。

## 五 「無常臨殯序」との類似

ところで、当該の山上憶良詩については、それが受容したかと考えられる具体的な文献を指摘する試みも、多くの蓄積がこれまでに成されている。その中で、とりわけ重視されるものとして、正倉院に伝来した聖武天皇宸筆の写本が残る『雑集』と題される詩文集がある。この『雑集』は、冒頭が欠けているようであるが、まず諸家による仏教関係の詩文、そして『鏡中釈霊実集』、その後には『周趙王集』という構成で、全体的に仏教色の濃い作品が収載されている。収録されるさまざまな作品の中でも、特に次に掲げるものは、当該の山上憶良の詩文とは、かなり重要な関わりを有するのではないかと注目される。

### 無常臨殯序

① 夫無常之法、念念遷流、有為之道、心心起滅。雖復單越定寿千年、非想大期八万、而同居火宅之内、俱弊死生所逼。況復閻浮世界、命脆藤懸、娑婆国土、身危驚電。② 所以逝川覺其迅疾、過隙歎其奔馳。鏡像喻其非真、乾城方其無実。今者檀越、過去亡人、遘疾不癒、奄然万古。③ 光顏若在、便懷丘墓之悲。盛德未衰、仍為泉壤之隔。④ 奈何罷去、更一面而無期。嗚呼哀哉、

豈再逢之可望。贈贈已觀、卜哈便畢。蓋棺定諡、正是今時。非但子弟崩号、親知悲恋、亦可鄉党嗟悼、賓遊痛惜。□但有生皆死、自古同然、夫有盛必衰、何人得免。文旦天地安靜、氣序調和。須枕告徂、高臥啓尽。棺槨以礼、親隣畢集。善始令終、差無遺恨。必願奔識解劍、示以天人之衢、閻羅報筆、題以功德之簿。必当昇淨御境、沐浴八解之池、遊步宝階、逍遙千花之殿。然後道心具足、無生之忍現前、惠命延長、一相之理明白。又当覆陰大小、令万寿無量、福利子孫、千秋永子。唯願藉仏神力、因僧勝善、願亡者曰、  
曩生障業、一念消除。積世瑕殃、俱時清淨。出恩愛之緣縛、断煩惱之得繩。懷無始之有軛、到涅槃之彼岸。(曩生の障業は、一念にして消除す。積世の瑕殃は、時と俱に清淨たり。恩愛の縁縛を出で、煩惱の得繩を断て。無始の有軛を懷みて、涅槃の彼岸に到れ。)

〔「無常臨殯序」の本文・訓読は、安藤信廣「聖武天皇宸翰『雑集』「周趙王集」研究<sup>17)</sup>による〕

この「無常臨殯序」という作品が、当該の山上憶良の詩文に大きな影響を与えているのではないかとこの指摘は、すでに佐藤美知子「憶良の「日本挽歌」の前置詩文<sup>18)</sup>」によって成されている。先掲の「無常臨殯序」本文中に付した①～④の傍線部も佐藤論文の指摘に関わる。以下、佐藤論

文の關係箇所を引用する。同論文は、「無常臨殯序」とは「殯中設齋のもの」で一種の齋文であろうという。

次にB（高松注・『雜集』所収文）の一二三番（無常臨殯序）は冒頭部からの構成・表現・文意等いろいろ注目される。この文の発語は「夫」で、「蓋聞」を用いていないが、作者周趙王は一一六番の「葉師齋序」、一二二番の「平常貴勝唱礼文」等では「蓋聞」を用いて、釈教的な思考を展開している。右の「夫」以下の無常の法を陳述する①の部分、無常の迅速と閻浮娑婆の世界の空虚なことを述べる②の部分等、A（高松注・当該の山上憶良の詩文）と類似の調子の文である。また③の「光顔」・「盛徳」はAの紅顔・四徳を連想させるが、或いは亡人は男性であったかと思える。④の永別、再逢の無期等の表現はまたAに類似の表現である。

このように、具体的な構成や表現の類似を指摘したうえで佐藤論文は、山上憶良の当該の詩文について、『雜集』所収の他の齋文の影響をも受けつつ、「表現及び全体の構成は、『雜集』中でも最も傑出した名文家の周趙王の、就中「無常臨殯序」によって、没後約百日〜百十日前後の旅人亡妻の供養設齋文の手本にしたのではなかったか」と述べる。当該の山上憶良の詩文を、齋文そのものと考ええるの

が適当かどうかにはなお検討の餘地があるが、「無常臨殯序」との構成や表現の類似の指摘は、極めて重要な指摘だと考える。『雜集』所収の齋文の数々の中には、山上憶良の当該の漢文のように「嗟乎痛きかも」「嗚呼哀しきかも」と、悲嘆を強調する文言を有するものは、実はほとんど存在しない。その中で、「無常臨殯序」が、「嗚呼哀哉」（傍線部⑤の一節）「嗟悼」「痛惜」といった語句を頻用するのも、見逃せない事実である（この点も佐藤論文は指摘）。そのことを確認したうえで、前節で問題にした事柄になんらかの解決は見通せないものであろうか。

佐藤論文は、当該の山上憶良の詩文について、「仏教的な供養の設齋に奉る唐風齋文」と規定し、その齋文とは「死者（近親または久遠の先霊等）に設齋の意を告げて、哀悼と極楽浄土に登ることを祈るのであり、またついでに生者の積善の功德による景福をも願うというもの」としているが、当該の詩の具体的な大意について説明する記述がない。しかし、右に引いた佐藤論文の説明によれば、死者への哀悼が残された遺族の景福を祈ることか、そのあたりが当該の詩の主題になっているということになるか。従来の当該の山上憶良詩の理解では、一首は妻を亡くした男の立場から、自身の浄土への転生を庶幾しているとされるので、佐藤論文の提示した枠組みで捉える限り、遺族の景

福を祈っている、と捉えることになるのであろうか。

「無常臨殯序」を含む『周趙王集』は、独特の仏教的表現や語彙を多く含み、解釈に難渋する文献であるが、最近、安藤信廣『聖武天皇宸翰「雑集」』、「周趙王集」研究』（先掲）が刊行されたことは、内容の理解にとつて大きな助けとなった。それによると「無常臨殯序」では、無常の必然に抗えずはかなく逝った死者を愛惜し、礼式にかなった送葬によつて、死者の浄土への往生がかなうであろうこと、ついでには遺族たちに景福が期待できるであろうことを述べ、最後に「唯願藉仏神力、因僧勝善、願亡者曰（唯願わくは仏神の力に藉り、僧の勝善に因り、亡者に願りて曰わん）」として、末尾の四六文（先掲の本文で太字にした部分）が全体をまとめる。その末尾の「願り」の文に対して、安藤氏の注解は次のような「通釈」を付している。

（あなたの）さわりとなるさきの生の業は、一瞬のうちに消えのぞかれました。幾世にもわたつて積みかさなつてきた誤ちと災いは、時を同じくして清らかになりました。さればこそ人の世の恩愛のえにしのいませめて、煩惱の貪りのなわめを断ち切りたまえ。この人の世の永遠の有為転変のすがたを心につつま、彼岸の悟りの世界へ到り着きたまえ

当該の山上憶良詩も、この理解の方向性でよいのではな

かろうか。つまりすべては死者のことを話題にしているのではないのだろうか。山上憶良詩の初二句は、妻が死去したことをいつているという理解は通説のとおりで問題ないのだが、その結果、愛欲や煩惱が解消したのは、ほかならぬ死者自身なのである。第三句の「従来」も、新大系以前の通説「もとより」「かねて」で問題なく、亡妻が生前から仏教に帰依していたことをいうのであろう。その生前の志のままに、仏の本願にすがつて浄土に生まれ変わつてくれと切望するのが、第四句のいわんとするところで、つまりは一首の主題でもあるのだと思う。

### おわりに

右に述べた当該の山上憶良詩についての理解は、実はすでに富原カンナ「日本挽歌」に前置された七言四句詩についての考察<sup>19</sup>によつて主張されていた解釈であった。富原論文は、詩の前半二句については、先述の『雑集』所収『鏡中釈霊実集』や敦煌願文、「性霊集」から願文や斎文を検討し、「故人の死により己が煩惱がなくなつたと見ることは現実的ではなく、死者の愛河、煩惱の消滅を述べたとみならず方がより妥当であろう」とし、後半二句については、奈良時代の写経奥書にみえる願文の表現類型から、「妻が生前から穢土を厭つており、かねてからの願ひ通り、淨刹

に往生できることを祈願する」と理解するのが妥当と指摘する。本稿もこの解釈に賛同するものである。富原論文には周趙王「無常臨殯序」について特に言及がなく、むしろ山上憶良が接することができた死者供養のさまざまな文の種類・類想から右のごとき解釈を導いている。そこが、本稿としても却って心強いところであるのだが、なおもって「無常臨殯序」との類似は、単純な類型・類想の範囲を越えて直接的であるように思われる。

とはいえ、山上憶良は、周趙王「無常臨殯序」の模倣作を試作したというにとどまるものでもない。「無常臨殯序」の「願亡者曰」以下の部分は、最後に死者の安らかな往生を願う部分としてそれ以前とは自立的ではあるものの、文體はそれ以前と同じ四六文であるのに対し、山上憶良は、七言四句の詩として完全に自立させる。願文や齋文に詩を付すという形式は類型になく、そもそも漢文部分も、本来の願文・齋文からすれば、仏への帰依や讃仰の文言を含まないことは異例である。「無常臨殯序」と比較しても、喪葬儀礼の具体的な描写や遺族の景福祈願に相当する部分は、山上憶良の漢文には一切ない。死者喪葬の実用的な作文をしているものとは言い難く、むしろそれに器を借りて、妻を失った大伴旅人に共感的に寄り添い、成り替わって叙情することに意を用いている。強い思いの表白としては、漢

詩こそが相応しい形式なのだという、山上憶良のある種の文学観が表れているのであろう。

## 注

- (1) 本稿に引用する『万葉集』の本文・書き下しは、すべてCD-ROM『萬葉集』（塙書房）による。
- (2) ただし、巻五目錄では「嘉摩三部作」については、各作品ごとに「山上臣憶良」と作者名を明記するが、当該の漢詩文については、まったく記述を欠いている。新大系はその点も指摘しており、たしかに不審ではある。『万葉集』の写本では、漢詩を前置文と改行せず連続して記すものがあり（紀州本および仙覚文永本系諸写本）、あるいはそのような写本に基づいて、目錄の作者は当該の漢詩文を「日本挽歌」の序と理解したものか。
- (3) 芳賀紀雄「憶良の挽歌詩」（一九七八初出、『萬葉集における中國文學の受容』塙書房、二〇〇三）。
- (4) 高田文英「厭離穢土」について―笹田教彰氏の論考をうけて―（『印度学仏教学研究』五三一―二、二〇〇四）。
- (5) <http://21daklu.tokyo.ac.jp/SAT/>
- (6) 『大藏経全解説大事典』（雄山閣出版、一九九八）の「釈浄土群疑論」の項（執筆は中西随功）および『仏書解説大辞典』（改訂版）五（大東出版社、一九六四）の「釈浄土群疑論」の項（執筆は福島愍雄）。
- (7) 『説無垢称経疏』は、基法師撰『維摩経疏』などとし

て正倉院文書卷三・五五六頁、卷二・五三〇頁、卷一七・八二頁、八四頁にみえる。『釈浄土群疑論』は同じく卷一三・三五頁にみえる。

(8) 『説無垢称経疏』の理解にあたっては、橋本芳契「初唐仏教の一断面―慈恩大師の維摩経観―」（『金沢大学法文学部論集・哲学史学編』七、一九六〇）を参照した。

(9) 村上真瑞『釋浄土群疑論』卷第一和訳・辞典（山喜房佛書林、二〇一七）「解題」。

(10) 『釈浄土群疑論』の理解にあたっては、注（9）村上真瑞著書を参照した。

(11) 奥書は左のとおり。

保安二年閏五月興福寺陽信披読終

了碩師遊京師得知足坊清慶本或全備或殘闕予所写者是也更对校原本間以已見正其誤写至疑者闕焉得善本者止之幸而已

享保辛亥年八月二十四日

縁山羽由翼 真 徴

此書先年馳他筆雖已繕写之而未會拝読此歳三月以來積聚稍間是以謹拝覽烏焉魯魚是円展転伝写

茲時天保第七丙申四月朔日依自珍師之命書写之畢

湖中沙門 覺 城

(12) 金子寛哉「懐感伝の研究」『釈浄土群疑論』の研究（大正大学出版会、二〇〇六）、および注（6）。

(13) 『望月仏教大辞典 増訂版』二（世界聖典刊行会、一九五七）の「三論宗」の項。

(14) 拙稿「山上憶良「沈痾自哀文」と仏教語彙」（『萬葉集研究』三五、塙書房、二〇一四）、「山上憶良の語彙をめぐる諸問題―「沈痾自哀文」を中心に」（『美夫君志』九〇、二〇一五）。

(15) 『敦煌I』（大乘仏典 中国・日本篇一〇、中央公論社、一九九二）「解説・講経文献」（松尾良樹）。

(16) 鉄野昌弘「日本挽歌」（『万葉の歌人と作品』五、和泉書院、二〇〇〇）。

(17) 安藤信廣『聖武天皇宸翰「雜集」「周趙王集」研究』（汲古書院、二〇一八）。

(18) 佐藤美知子「憶良の「日本挽歌」の前置詩文」（一九八六初出、『萬葉集と中国文学受容の世界』塙書房、二〇〇二）。

(19) 富原カンナ「日本挽歌」に前置された七言四句詩についての考察」（『西日本国語国文学会会報』平成一九年度、二〇〇七）。なお、「厭離」「託生」の主体を亡妻と捉える解釈は、早く窪田評釈が示している。しかし「郎女に代つて作つてゐる形のもの」との理解が、富原論文及び本稿と異なる。

(20) 注（16）鉄野論文も指摘するところ。